

研 究

発達障害のある人の自分自身のとらえ方

—自閉症スペクトラム障害を中心に, 思春期の発達課題に注目して—

花井 文¹⁾, 奈良間美保²⁾

〔論文要旨〕

発達障害のある人の自分自身のとらえ方を, 思春期の発達課題に注目して明らかにし, 看護支援を検討することを目的として, 成人5名に半構造的面接を行い, 質的帰納的分析を行った。結果, 3つのカテゴリー【ほんやりとした感覚で自分をとらえる】,【自分の感情・感覚に気づき, 実感する】,【自分の感覚・考え・意向を持ち, 主体としての自分を実感する】が抽出された。3つのとらえ方は, 個人の体験や発達段階によって, 多様に変化していた。人が他者との関わりやさまざまな体験の中で, 自分の感覚や主体としての自分を実感する過程を, 長期的に支える支援が重要である。

Key words : 発達障害, 自分自身のとらえ方, 思春期, 発達課題

I. 緒 言

平成17年に発達障害者支援法が施行され, 平成22年に障害者自立支援法の対象となるなど, 発達障害に対する社会の意識が高まっている。Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth edition (DSM-5) の診断基準に示される社会性やコミュニケーションに困難がある自閉症スペクトラム障害 Autism Spectrum Disorder (ASD), 衝動性のコントロールや, 実行機能に困難がある注意欠如/多動性障害 Attention-Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), 知的発達に遅れがないが, 書字や計算などに困難がある限局性学習障害 Specific Learning Disorder (SLD) のある子どもは, 通常学級在籍児の約6.5%¹⁾, 特別支援級在籍児の約40%²⁾を占めている。近藤らは³⁾, 発達相談や療育, 特別支援教育の広がりなどの乳幼児期から学童期における支援の充実と比較し, 高校教育や就労支援などの思春期以降のサポート体制は十分では

ない, と指摘している。

思春期は, 急激な身体的成長と性の発達が進み, 自我同一性に悩み始める激動の時期である⁴⁾。仲間や異性との交流がより重要な意味を持つようになり, 他者との関わりを通して自己を形成していく時期である。しかし, 発達障害がある子どもの自己の発達については注目され始めたばかりであり⁵⁾, 実証的に扱った研究は少ない。SLD児・者の自己については, 学習困難や学業不振などにより, 自己評価の低下がみられ, 年齢とともにその傾向が強まる, との報告がある⁶⁾。ADHD児・者の自己に関しては, 失敗体験の積み重なりによる自信喪失, 自己嫌悪を体験しやすい点や^{7,8)}, 思春期の男児は怒りや反抗, 女児は行動のスキルの不十分さや欠点から自己を表現するなど, 安定した自己を持ちにくい傾向があることが指摘されている⁹⁾。ASD児・者の自己については, 他者を通して自分自身を意識するという自己意識が乏しい可能性¹⁰⁾, 年齢が高くなるにつれて自己理解が深ま

Recognition of Self in Adults with Developmental Disorders :
Focusing on Developmental Tasks in Adolescence Mainly about Autism Spectrum Disorder
Fumi HANAI, Miho NARAMA

〔2967〕

受付 17.10.12

採用 18. 7.13

1) 名古屋大学大学院医学系研究科 (大学院博士後期課程)

2) 名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻 (研究職)

る一方、自己否定的になる傾向¹¹⁾などが報告されている。しかしいずれも、障がい特性と自己との関連、あるいは自己の一側面を客観的な尺度を用いて測定した研究であり、発達障害がある人本人が、自己全体をどのようにとらえているのかに注目し、その様相を明らかにした看護研究はほとんどみられない。また、発達障害がある思春期の子どもは、発達課題に合った仲間関係を持つことに困難を生じやすいといわれ¹²⁾、他者との関わりを通して自己をとらえる過程において、より困難を体験しやすいと考えられる。以上より、思春期の発達課題に注目して、発達障害がある人が、自分自身をどのようにとらえているのかを、本人の視点から明らかにすることは、発達障害がある人の発達過程を長期的に支える看護を検討するうえで重要であると考え、本研究を行った。

Ⅱ. 目 的

発達障害がある人の自分自身のとらえ方を、思春期の発達課題に注目して明らかにし、看護支援について検討する。

Ⅲ. 対象と方法

1. 対象者および調査内容

方法を参照できる先行研究が非常に少ない中、発達障害がある思春期の子どもに自己に関する面接を行うことは、混乱や不安を増強させる可能性があると考え、①20～30歳代、②診断・告知から1年以上経過している、③知的障害がなく、言語的コミュニケーションが可能である、④健康状態が安定していると主治医に判断されている、⑤社会的な親子分離や治療を必要とする外傷体験がない、の条件を満たす方を対象とした。

2. 用語の定義

発達障害の診断名は併存することが多い現状¹³⁾を考慮し、発達障害を「ASD・ADHD・SLDのいずれか、あるいは重複を含む」とした。思春期を「学童期から青年期の過程にあり、自分自身に関心を持ち、周囲との相互作用を通して自我形成を行っていく時期」、自分自身のとらえ方を「自分の感覚、感情、認識、考え、体験からなる本人が持つ自己全体のイメージと、イメージを持つ過程の様相」とした。

3. データ収集方法

任意に選定した医療施設、福祉施設の代表者に研究依頼文を送付し、対象者の選定を依頼した。研究者からの説明を受けることを承諾された方へ、研究の目的・方法・意義・倫理的配慮および、面接に要する時間と内容、調査の流れについて、視覚的に理解しやすいよう図式化した書面等を送付した。研究参加の同意が得られた方に、説明内容を文書にして渡し、研究者が口頭で説明を行い同意を得た。属性に関する自作の質問紙調査と、インタビューガイドに基づいた半構成的面接を行った。承諾を得てメモをとり、面接内容を録音した。具体的な質問は、「自分自身に関心を持ち始めたのは何歳の時ですか」、「どのように自分自身をとらえていましたか」、「とらえ方に影響した出来事がありますか」などである。調査は平成23年9月～平成24年1月に実施した。なお、本調査と同様の方法で予備調査を行い、本人の負担なども含めて方法の安全性・妥当性を確認したうえで本調査に取り組んだ。予備調査のデータは加えずに分析した。

4. 分析方法

面接内容から逐語録を作成し、自分自身のとらえ方とその変化、自分自身のとらえ方に影響した出来事に関する感覚・感情・認識・考え・体験について、語りのまとまりを単位として抽出し、データの言葉を活かしてコード化した。5事例で継続比較分析を行い、抽象化しサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。各事例のプロセス、事例間の比較によりカテゴリー間の関係について検討し、幼児～小学生を思春期以前、中学生～就労までを思春期、就労以降を成人期として整理した。使用するデータに過不足がないか、小児看護研究者と繰り返し確認を行い、妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

研究参加への自由意思、拒否・中断の自由、プライバシーの保護について、文書と口頭にて説明し、同意を得て実施した。自分自身を振り返り、過去の体験を想起することにより、混乱や動揺等の精神的負担を負う可能性が考えられるが、その場合には速やかに面接を中止し、対象者の安寧を再優先することとした。研究者の所属機関および、協力施設内倫理委員会の承認を受けて実施した。

表1 対象者の概要

事例	A	B	C	D	E
年齢	34歳	27歳	32歳	35歳	33歳
性別	男	女	男	女	男
職業	会社員	会社員	アルバイト	主婦	会社員
診断名	ASD	ASD	ASD	ASD	ASD,ADHD

ASD: Autism Spectrum Disorder

ADHD: Attention-Deficit Hyperactivity Disorder

IV. 結 果

1. 対象者の概要

1 医療施設と1 福祉施設より、男性3名・女性2名の計5名の対象者を得た。平均年齢は32歳で全員にASDがあり、1例にADHDが併存していた。面接時間は68～123分（平均102分）で、調査による精神的な動揺、混乱はみられなかった（表1）。

2. 発達障害のある人の自分自身のとらえ方

分析の結果、17サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された。【 】はカテゴリー、『 』はサブカテゴリー、「 」は語りを示した（表2）。

1) 【ぼんやりとした感覚で自分をとらえる】

思春期以前から成人期において、彼らは実感や感情の動きがはっきりしない漠然とした感覚で自分をとらえていた。「自分にもう一つカメラがついていて、自分のやっていることでも、人のことでも、全部すごく第三者的に見ている（B）」、「自分の業務ができていくか（どうか）は、数字でわかった（C）」など、『第三者が観察し評価するように自分をとらえる』体験、「何で自分は、人とうまくいかないのかなっていうのを、意識し出したのは小学校3、4年生のあたりだった（A）」、「先生が自分を守ろうと思っているのを、いつもなんとなく感じていた（D）」など、『人と自分の関係性をなんとなく感じとる』体験をしていた。さらに、「自分は、人の名前が覚えられないと、薄々感じていた（C）」、「幼稚園の時にただ漠然と、自分は人とは違うなと思っていた（B）」などからなる、『人との関わりを通して自分の傾向・特徴をぼんやりとを感じる』、「中学高校の頃は、自分は変わった人と思われて、近寄り難い雰囲気を出していたらしいと、漠然と感じていた（A）」など、『他者から見た自分をなんとなく感じる』体験をしていた。

2) 【自分の感情・感覚に気づき、実感する】

彼らはさまざまな体験から、自分の感覚や感情に気

づき、実感しており、このとらえ方は全事例とも、思春期以前から成人期に継続してみられた。「疲れると、身体が先に破綻を来す（B）」、「できた感覚が全然持てなくて、やってもやっても怖い（D）」、「アイデアが次から次へと浮かぶ（E）」など、『人との関わりを通して、自分の特徴・傾向・能力を実感する』体験の内容は多様であった。

彼らは、「社会や大人はつまらないと思っていたけれど、どうして自分はそう感じるのか、と自分にだんだんと興味が向いてきた（D）」、「自分に関心を持つということの基準は、周りから見られる自分を意識するとか、他人が関係することにある（E）」など、『自分自身に関心を持つ』ようになっていたが、その時期は、保育園から高校生の間であり、事例によってさまざまであった。

彼らは、「仲の良い子は本当のことを言ってくれるから、居心地がいい（B）」、「夜中まで、男同士でつるんで、バレーで怒られて、でもそれが楽しかった（E）」など、『人との関わりを良いものと感じ、自分が人に支えられている感覚を持つ』体験をしていた。しかし、人との関わりで苦しみや傷つくことも数多く、「なんとか自分を変えようと思って人と関わろうとしたけど、逆にうまくいかなかった（C）」、「関わりを求められて、一人になりたいのになと思って、疲れることもあった（D）」など、『自分にとって人・社会と関わることは大変で辛く苦手だと感じる』経験を重ねていた。全員が、学校や職場などで、いじめやハラスメントを体験しており、「小さい頃から人に相談してなんとかすると思ったことがない（B）」、「母親なのにどうして自分のことをわからないの？と思っていた（D）」など、『人との関わりを通して、自分が傷つき満たされないと感じる体験を重ねる』ことが全事例にみられた。「なんか、自分は生きにくいかな、っていうふうにとらえていた（A）」など、『自分が生きていることを苦しいと感じる』事例もみられた。

一方、「a大学の人のお話を聞いて、すごくいいなあ、自分も行きたいなあと思うようになった（A）」、「最近やっと、発達障害があってもなくても、人生山あり谷ありだと思うようになった（D）」など、『人との関わり・体験を重ねて自分の感覚・考え・行動の変容を実感する』体験をしていることが全事例にみられた。

表2 発達障害のある人の自分自身のとらえ方

【カテゴリー】	『サブカテゴリー』	語りの内容の一部（事例）
ぼんやりとした感覚で 自分をとらえる	第三者が観察し評価するように自分をとらえる	自分にもう一つカメラがついていて、自分のやっていることでも、人のことでも全部すごく第三者的に見ている（B） 自分の業務ができてはいるかは、数字でわかった（C）
	人と自分の関係性をなんとなく感じとる	何で自分は、人とうまくいかないのかなっていうのを意識し出したのは、小学校3、4年生のあたりだった（A） 先生が自分を守ろうと思っているのを、いつもなんとなく感じていた（D）
	人との関わりを通して自分の傾向・特徴をぼんやりと感じる	幼稚園の時にただ漠然と、自分は人とは違うなと思っていた（B） 自分は人の名前が覚えられないと、薄々感じていた（C）
	他者から見た自分をなんとなく感じる	中学高校の頃は、自分は変わった人と思われて、近寄り難い雰囲気を醸し出していたらしい、と漠然と感じていた（A）
自分の感情・感覚に気づき、実感する	人との関わりを通して、自分の特徴・傾向・能力に気づき実感する	疲れると身体が先に破綻を来す（B） できた感覚が全然持てなくて、やってもやっても怖い（D） アイディアが次から次へと浮かぶ（E）
	自分自身に関心を持つ	社会や大人はつまらないと思っていたけれど、どうして自分はそうに感じるのかと、自分にだんだんと興味が向いてきた（D） 自分に関心を持つということの基準は、周りから見られる自分を意識するとか、他人が関係することにある（E）
	人との関わりを良いものと感じ、自分が人に支えられている感覚を持つ	仲の良い子は本当のことを言ってくれるから居心地がいい（B） 夜中まで、男同士でつるんで、バレーで怒られて、でもそれが楽しかった（E）
	自分にとって人・社会と関わることは大変で辛く苦手だと感じる	なんとか自分を変えようと思って人と関わろうとしたけど、逆にうまくいかなかった（C） 関わりを求められて、一人になりたいのになと思って、疲れることもあった（D）
	人との関わりを通して、自分が傷つき満たされないと感じる体験を重ねる	小さい頃から人に相談してなんとかなると思ったことがない（B） 母親なのにどうして自分のことをわからないの？と思っていた（D）
	自分が生きていることを苦しいと感じる	なんか自分は生きにくいかな、っていうふうにとらえていた（A）
	人との関わり・体験を重ねて自分の感覚・考え・行動の変容を実感する	a 大学の人の話を聞いて、すごくいいなあ、自分も行きたいなあと思うようになった（A） 最近やっと、発達障害があってもなくても、人生山あり谷ありだと思うようになった（D）
自分の感覚・考え・意向を持ち、 主体としての自分を実感する	他者の視点で自分をとらえ直し、新たな気づきを得る	わかりにくい子どもだったと、やっと自分でわかった（D） 自分はすごく周りとの連帯感を持っていたつもりだったけれど、今思えば浮いていた（E）
	過去を振り返って自分の可能性を惜しむ	発達障害ともっと早くわかっていたら、もっとうまいことやってたんじゃないかな（A） あんまり人と接しない研究職とか、そういう打ち込んでやる他の職業、他の選択肢もあったかなと思う（B）
	家族と自分のことで悩む	親も、発達障害の傾向があった人なのかもしれない（B） 家に居たくないから、寄り付かなくなって、居づらくなるという悪循環になっていた（D）
	自分の感覚・主体的な考えを持つ	就職して、ん？というのが強くなった（B） つまらない大人の社会の中で、面白く生きてやるという気持ちがあった（D）
	自分はこうありたいという意向を持つ	障がいだとわかってはいるけれど、その自分の操り方をよくわかっていなくて、もうちょっとうまいことできるようになればいいなと思う（B） 自分は普通の生活を無理なく、したいだけ（D）
	自分のとらえ方は今までもこれからも変化していくと感じる	自分を過信することも否定することも、今はそんなになくて、両方が歩み寄っている感じがする（D） 今の自分も、10年後の自分が見たらガキだったなと思うかもしれない、固定されることはないと思う（E）

3) 【自分の感覚・考え・意向を持ち、主体としての自分を実感する】

全事例とも成人期に、自分がさまざまな感覚や考えや意向を持っていると認識し、個人的で主体的な志向性を持つ存在として自分をとらえていた。2事例において、思春期以前にみられた【自分の感覚・考え・意向を持ち、主体としての自分を実感する】とらえ方が思春期にみられなくなり、成人期になって再びみられた。「わかりにくい子どもだったと、やっと自分でわかった (D)」、「自分はすごく周りとの連帯感を持っていたつもりだったけれど、今思えば浮いていた (E)」など、『他者の視点で自分をとらえ直し、新たな気づきを得る』ことが見て取れた。自分の感覚や考えを持つことによって、寂しさや苦しさを体験することもあり、「発達障害ともっと早くわかっていたら、もっとうまいことやってたんじゃないかな (A)」、「あんまり人と接しない研究職とか、そういう打ち込んでやる他の職業、他の選択肢もあったかなと思う (B)」など、『過去を振り返って自分の可能性を惜しむ』ことが見て取れた。

家族と自分との関係について、「親も若干、発達障害の傾向があった人なのかもしれない (B)」、「家に居たくないから、寄り付かなくなって、居づらくなるという悪循環になっていた (D)」など、自分の感覚で主体的に考え、『家族と自分のことで悩む』体験が語られた。

また、周囲との関わりの中で、「就職して、ん？というのが強くなった (B)」、「つまらない大人の社会の中で、面白く生きてやるという気持ちがあった (D)」など、『自分の感覚・主体的な考えを持つ』ことが見て取れた。「障がいだとはわかってはいるけれど、その自分の操り方をよくわかっていなくて、もうちょっと、うまいことできるようになればいいなと思う (B)」、「自分は普通の生活を無理なく、したいだけ (D)」など、『自分はこうありたいという意向を持つ』ようになっていた。「自分を過信することも否定することも、今はそんなになくて、両方が歩み寄っている感じがする (D)」、「今の自分も、10年後の自分が見たらガキだったなと思うかもしれないと、固定されることはないと思う (E)」など、『自分のとらえ方は今までもこれからも変化していくとを感じる』体験をしていた。

複数のとらえ方が同時に存在する時期と、各とらえ方が単独でみられる時期があるなど、現れ方のパター

ンは、事例によって多様であった。3つのカテゴリーが同時にみられたのは、3例が思春期以前、2例が成人期であった。

V. 考 察

発達障害のある人の自分自身のとらえ方について検討し、看護への示唆と今後の課題を述べる。

発達障害のある人の自己のとらえ方の様相

1) 主体としての自分を感じる前段階：【ぼんやりとした感覚で自分をとらえる】

彼らは、思春期以前から自分の感情や実感を伴わない、漠然とした感覚で自己をとらえていた。第三者が観察するように、自分と周囲を眺めるなど、体験した事実に対しては客観的な視点で詳細に語られるが、その時の自分の感情については語られない、あるいは詳細な感情の内容については語られなかった。一般的な子どもの自己の認識の発達について、小倉¹⁴⁾は「子どもは初めは自他の区別が混沌として不分明であり、世界は自分の延長であると感じている」と述べている。自他の境界が明確でなく、ぼんやりとした感覚で自分をとらえる過程は発達障害の有無に限らず、自己をとらえていく過程の初期の段階と考えられた。しかし今回、彼らは成人期においても、依然ぼんやりとした感覚で自己をとらえていることが明らかとなった。齋藤¹⁵⁾は「精神発達の早期から、その瞬間瞬間に体験する感情体験の累積を通じて、成立してくる自己感と、それを反映した自己像が、“自分”という内的イメージへと結晶化していく」と述べている。また、自己を形成するには、情動を含めた他者との共有体験が保障されることが基盤になると言われる¹⁶⁾。発達障害がある人は、人との関わりに困難を持つことが多いことから、成長発達の過程で他者の感情に触れたり共有したりする体験が少なく、自他の境界や、自己感、自己像を感じにくく、成人期においても漠然とした感覚で自己をとらえている可能性があると考えられた。しかし一方で、言語的表現に困難さがあるために、事実を中心とした語りとなった可能性も考えられる。常田¹⁷⁾は、発達障害のある人が、体験を語ることと自己形成には関連があるとし、展開不足や意味付けの困難などを報告している。しかし今回、「仲の良い子は本当のことを言ってくれるから、居心地がいい (B)」、「社会や大人はつまらないと思っていたけ

れど、どうして自分はそうに感じるのかと、自分にだんだんと興味が向いてきた(D)」など、人と居て心地良いという感覚や、それまでの自分の感覚に対する疑問や興味が語った事例もあった。つまり、感情が伴わない語りが聞かれた理由は、必ずしも表現の困難さによるとは言い切れず、彼らの自己への特徴的なとらえ方を示唆していると考えられた。さらに、自分は周囲とうまくいっていないと感じる、人との違いに気づくなど、彼らは他者との関わりにおいて安定した人間関係が維持されにくいことから、他者の感情に触れたり共有したりする機会が少なく、自己についての感覚が安定しにくいことが示唆された。他者の感情に触れたり共有したりする体験を安全に積み重ねていけるよう、生活全般に関わる看護師には自己の育ちを支える役割が期待される。

2) 自分についての発見や気づきを、人との関わりや体験を重ねる中で実感する：【自分の感情・感覚に気づき、実感する】

彼らは、自分が持っている気持ちや感覚に気づき、実感することを重ねていた。年齢が上がるにつれて、「苦手だ」、「できない」と感じる体験が増えており、その理由としては、集団行動や礼儀作法、雰囲気を読み取ることなどを周囲から求められることが増え、複雑になり内容も変化することが影響していると考えられた。

村瀬¹⁸⁾は、支援が必要な子どもたちが自分をどのように受けとめているのかについて、気がついてみれば失敗している、という不本意な結果にさらされており、楽しいと経験される行為がそのまま容認されることが少ないことを指摘している。本研究においても同様の結果が示され、自分に対する気づきや発見を重ねる過程において、周囲から理解、共感されにくく、また学業で苦勞しやすいため自信や満足感を積み重ねにくいなど、「これが自分の感覚だ」と実感し、自分の持つ感覚を肯定することが促進されにくいと考えられた。本研究において彼らは、人との関わりを良いものと感じ、人に支えられていると感じる一方で、人や社会と関わることの大変さや辛さを日常的に強く断続的に感じていた。彼らが自分の力で、関係を立て直すことは容易ではないと考えられ、困難が生じやすい周囲との相互作用の中で、自己を育てるという発達課題に取り組む彼らを支えるための支援が必要であると考えられた。定本¹⁹⁾は、発達障害のある子どもの育ちは、親や

周囲の相互作用にどう守られ助けられたか、という因子が深く関わっているため、症状ではなく子どもの主観的な状況に注目し、相互作用のあり方を変えていく必要性を指摘している。また塩本²⁰⁾は、思春期 ASD 児との面接から自己の発達を考察し、「自分の思いを言語化し、他者に伝える、伝わるという体験を通して自分の感覚がより確かなものになっていく」と述べている。よって看護師は、苦しい体験や傷つきを重ねがちな彼らの自己の発達の過程を知り、自分についてのさまざまな実感をより安全に重ねていけるよう受けとめ共有することが求められていると考えられた。

3) 主体である自分を感じ、自分をとらえ直す：【自分の感覚・考え・意向を持ち、主体としての自分を実感する】

彼らは周囲の影響を受けながらも、自分はこうしたいという意向を持ち、その意向を主軸にして行動することで満足感を得たり、時には後悔したりするなど主体としての自分を感じる体験を重ねていた。自分の欲求や意向を持って行動した体験がどのようなものであったのか、本人がどうとらえているかに関心を寄せることが、彼らの自己の育ちを支えるために必要であると考えられた。また、このとらえ方は思春期以前にみられたが、思春期にはみられなくなり、成人期に再びみられるようになるパターンが3事例で、さらに全事例とも成人期にみられた。伊藤²¹⁾は、一般的な発達について、思春期・青年期は、それまでの学童期とは異なる主体性を再獲得する時期である、と述べている。今回の結果より、発達障害のある人は、思春期においてそれまでに感じていた主体である自分という感覚が揺らぎ維持しにくくなるが、周囲や社会と関わりながら自己に気づき、人間関係や人との違いに悩むなどの体験を重ねながら、成人期に新たな主体性を持つようになる可能性が推察された。

さらに全員が「自分のとらえ方はこれからも変化していくだろう」と語ったが、それを不安に感じる語りは聞かれなかった。変化に対応することに不安や困難を持ちやすいといわれる彼らが、ほかならぬ自分についての認識が変わっていくことを自然に受け入れている点は興味深い。園部²²⁾は、発達障害のある人は、独特の感覚・認知・行動などから社会的な違和感を体験するが、それを人に語ることが少ないことを指摘し、自分についての感覚を他者に語ることによって、自己認識や気づきが進む可能性を述べている。彼らが自分の感覚を語り共有する相手として存在することが、看

護師に求められていると考えられた。川野²³⁾は、「人は自分に気づくこと、自分自身を受け入れることで、他者との共有が可能になり関係が結べるようになる」と述べている。人と安定した関係を築くことに難しさを感じる人が多い彼らにとって、自分自身に関心を持ち、これが自分だと気づいたり実感したりすることは、彼ら自身の自己の発達を遂げるだけでなく、他者との共有を支え人とのつながりを保ちやすくする可能性があると考えられ、支援の重要性は高いといえる。「自分に関心を持つ」ということの基準は、周りから見られる自分を意識するとか、他人が関係することにある(E)」という語りにあるように、他者のあり方が自己への関心や意識に与える影響は大きいと考えられ、安定した関わりが維持されるよう、彼らの周囲の人に対する働きかけや調整を行うことも同時に必要である。

3つのとらえ方は、【ほんやりとした感覚で自分をとらえる】から【自分の感情・感覚に気づき、実感する】へ、さらに【自分の感覚・考え・意向を持ち、主体としての自分を実感する】へと変容していた。しかし、必ずしも年齢が上がるにつれて主体としての自分を実感する方向に進むとは限らず、思春期以前のように3つのとらえ方が同時にみられる時期があることも明らかになった。橋詰ら²⁴⁾の「ASDのある人は、ほんやりとした感覚と、さまざまな実感を持って生きている」との報告と同様の結果が示されたといえる。また、全事例において、思春期以前から現在に至るまで、一貫して継続していたのは、【自分の感情・感覚に気づき、実感する】とらえ方であり、今後の自己を支えていく基盤となり得ることが示唆された。今回、自己のとらえ方について各発達時期における具体的な感覚が本人の語りから示されたことは、本人の視点に立った看護援助や、さらなる研究を検討するうえで重要な意味を持つと考えられた。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、過去を振り返って語られた内容についての調査であり、自分自身のとらえ方は当時の感覚とは異なる可能性がある。また全員に自閉症スペクトラム障害の診断があり、結果が発達障害のある人全体の自分自身のとらえ方を反映しているとはいえない。今後は対象をより広げ、さまざまな発達段階における調査・実践等を積み重ね、本研究で示され

た知見の妥当性を確認し、さらなる検討を行っていく必要がある。

VII. 結 論

自分自身のとらえ方を明らかにするために、発達障害のある成人を対象に質問紙調査と面接調査を行い、発達過程の観点から分析した。結果、3つのカテゴリー【ほんやりとした感覚で自分をとらえる】、【自分の感情・感覚に気づき、実感する】、【自分の感覚・考え・意向を持ち、主体としての自分を実感する】が抽出された。3つのとらえ方は、単独で、あるいは同時に存在する時期がありパターンは多様であった。しかし全事例において、思春期以前から現在に至るまで【自分の感情・感覚に気づき、実感する】とらえ方は一貫して継続しており、自己の育ちを支えていく基盤になる可能性が示唆された。他者と共感し合うなど、安定した相互作用が継続されにくい彼らが主体としての自己の感覚を実感する体験を重ねられるよう、本人の主観や感覚に注目し、支えることが重要である。

謝 辞

調査にご協力を頂いた対象者の方々、病院・施設等の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、名古屋大学大学院医学系研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。研究費助成はありません。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 文部科学省. “通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について” <http://www.mext.go.jp>. (Accessed March 7.2014.)
- 2) 文部科学省. “平成26年度特別支援教育に関する調査の結果について” <http://www.mext.go.jp>. (Accessed March 7.2014.)
- 3) 近藤直司, 他. 青年期・成人期の発達障害者へのネットワーク支援に関するガイドライン. 2011: 3-5.
- 4) 岡堂哲雄. 小児ケアのための発達臨床心理. 東京: へるす出版, 1986.
- 5) 西田充潔. 高機能広汎性発達障害児の思春期・青年期における「自己意識」の発達—顕在的セルフアウェアネスの発達段階に着目した文献的検討—. 北星学

- 園大学社会福祉学部北星論集 2014 ; 51 : 140-149.
- 6) 宮原資英, 斎藤久子監修. 自己評価の問題. 学習障害～発達の・精神医学的・教育的アプローチ. 東京 : ブレーン出版, 2002 : 172-180.
 - 7) Mona M Shattell. "I have Always Felt Different" : The Experience of Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder in Childhood. *Journal of Pediatric Nursing* 2008 ; 23 (1) : 49-57.
 - 8) Roberta Waite. Unveiling the Mystery about Adult ADHD : One Woman's Journey. *Issues in Medical Health Nursing* 2009 ; 30 : 547-553.
 - 9) Marilyn Krueger, Judy Kendall. Descriptions of Self : An Exploratory Study of Adolescents With ADHD. *Journal of Child and Adolescent Psychiatric Nursing* 2001 ; 14 (2) : 61-72.
 - 10) 赤木和重. 言語確認行動を頻発し, 指示待ち行動を示した青年期自閉症者における自我の発達 ~自他関係の構造に注目して. 障害者問題研究 2007;34 (4) : 27-34.
 - 11) 十一元三, 神尾陽子. 自閉症者の自己意識に関する研究. 児童青年精神医学とその近接領域 2001 ; 42 (1) : 1-9.
 - 12) 筒井文恵. 青年期における高機能広汎性発達障害者の自己理解の発達の变化について—当事者へのアンケートおよびインタビューによる質的検討—. 人間科学研究 2009 ; 22 : 58.
 - 13) C Gillberg, Elisabeth Fernell. Autism Plus Versus Autism Pure. *Journal of Autism & Developmental Disorders* 2014 ; 44 : 3274-3276.
 - 14) 小倉 清. 小倉清著作集3. 岩崎学術出版社, 2008 : 42-45.
 - 15) 斎藤万比古. 発達障害を理解するための新たな視点—人格発達という文脈から—. 児童青年精神医学とその近接領域 2014 ; 55 (3) : 213-224.
 - 16) 別府 哲. 自閉症スペクトラムの機能連関, 発達連関による理解と支援他者の心の理解に焦点をあてて. 障害者問題研究 2014 ; 42 (2) : 11-19.
 - 17) 常田秀子. 軽度発達障害児の自己形成への支援. 和光大学人間関係学部紀要 2003 ; 8 (2) : 105-117.
 - 18) 村瀬嘉代子. 特別支援教育におけるカウンセリング・マインド—軽度発達障害児への理解と対応—, 精神療法 2007 ; 32 (1) : 10-17.
 - 19) 定本ゆきこ. 発達障害の子どもの育ちと家族支援. 障害者問題研究 2009 ; 37 (1) : 2-10.
 - 20) 塩本毅明. 自閉症の中学生男子に対する描画を用いた訪問面接. 心理臨床学研究 2011 ; 29 (4) : 465-475.
 - 21) 伊藤美奈子. 青年自我形成過程における自己受容研究の意義と視点. 青年心理学研究 1989 ; 3 : 20-28.
 - 22) 園部博範. 青年期の発達障害者に対するメタ認知育成の試み—彼らの語りを通して—. 崇城大学紀要 2014 ; 39 : 199-205.
 - 23) 川野雅資. ケア・アラカルト. こころの看護学 1997 ; 1 (3) : 213-214.
 - 24) 橋詰由加里, 辻井正次. 自分自身のことを知る. こころの科学 2010 ; 154 (11) : 126-132.
- 〔Summary〕
- The purpose of this study was to describe the recognition of self in adults with developmental disorders by focusing on developmental tasks in adolescence. Qualitative inductive methods were employed. The study participants were 5 adults with developmental disorders. Semi-structured interviews were conducted and the data were analyzed using an inductive method.
- Three main categories were found : "having a vague perception of themselves", "knowing and realizing their feelings and senses", "having senses, thoughts, and intentions, and recognizing their entity as an individuals". Their recognition of self changed through life experiences and developmental stages.
- It is important to support the process during which adolescents with developmental disorders become aware of their feelings, senses, and their entity as an individuals through interactions and life experiences at every developmental stage.
-
- 〔Key words〕
- recognition of self, developmental disorders, adolescence, developmental tasks